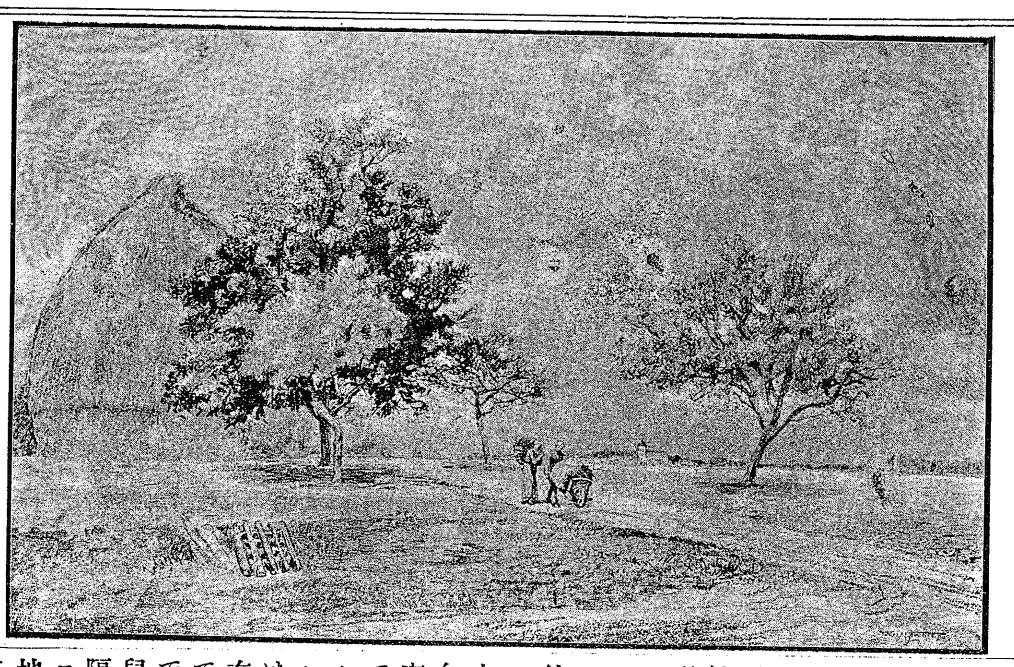
バルビゾン

芋洗生記

（一）

同伴は同じ學校友達のレナードと云ふ米國人、ガール・ド・リオンの停車場を九時卅分の瀘車で出て、ムランの停車場に降りたのが十一時頃。客待の馭者に就て聞けば目的にして居つた乘合馬車は、もう出た後で、次の發車は午後の四時、五時間から間



バルビゾンよりシャーイーを望む
（遙かに見ゆる寺塔はミレが著名の傑作アンゼラスの背に描き入れたるシャーイーの塔なり　ウサル、エチ、ロー氏筆）

て停車場前から乘り出した。時は十二月の中頃、天氣は珍らしい晴天。少し膚を刺す樣なキリットした空氣に面を露らし、窮屈そうに角張た枝先に、風に戰よぐ枯葉二ッ三ッ着けた、並木のシカモーアを窓外に見殘しながら走る心地の善さ。ムランからバルビゾン迄は小三里、途中にシャーイーと云ふ町がある。

（二）

シャーイーの村を外づれると、廣々とした野中に出る。あたりは一面の平地、眼を遮るものは處々に蟠くまる枯草の山と、淋し氣に立つ林檎の樹、佛蘭西の田舍に御定りのプープリエーの樹も今は銀葉を落して活氣なく、草箒を倒さまに立てたに違はず。唯だ威勢の善いものとては路傍に綠々と茂る牧草と其處此處の畠に飛狂う鴉ばかり。西南の方に丘陵相疊つて其の間には處ろ〳〵に壁を並べたかと思はるゝ低い農家が群まつて居り。東の方から北へかけては際限見へぬ迄に樹木繁茂して、冬枯の紫色は野中に群がる灰色の農家に面白い背景を作つて居る。車窓から首を突出して正面を見れば、衝あたりにも、同じ樣な小村があつて、一帶の家續きは長く森際迄も腕を展ばして居る。馬車が野中の一筋道を此村の方へ眞直に走る處を見れば、此村がバルビゾンであらうと馭者に尋れば、返答は推察に違はず。車内に取擴げた書物スケッチ本なぞ、俄かに足下の鞄に收め、降り仕度にかゝつた。

（三）

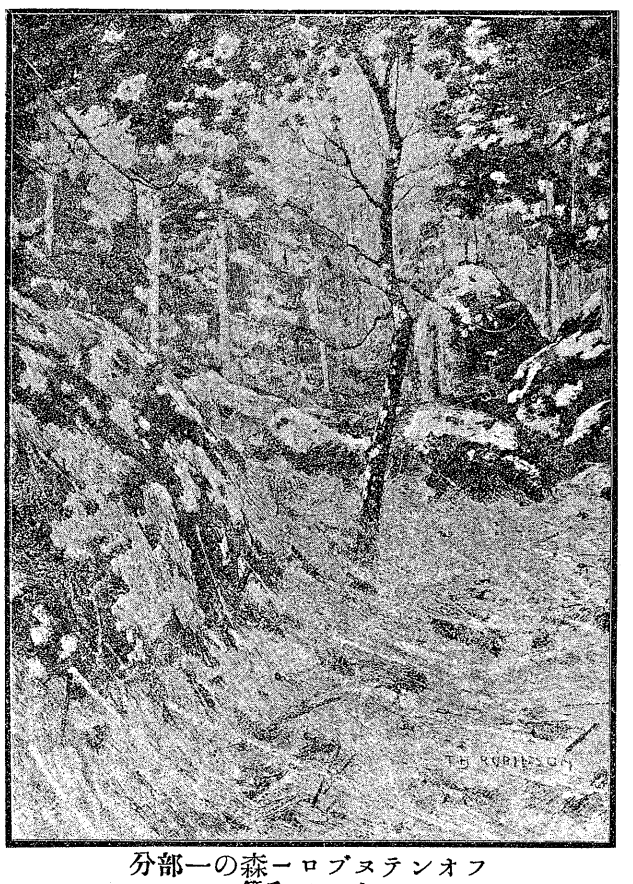
統計的に云へば、バルビゾンの村はセエンヌ・エ・マルン縣にあつて、シャーイー郡に屬し、巴里を去る事南方凡そ十三里、人口四百、戸數八十、田舍風の一本町は東西に延びて、延長凡そ十町、其東端はフオンテヌブローの森に接して、僅かにして巴里フオンテヌブロー間の大道に連絡し、シャーイーから南北へバルビゾンを貫く道は南の方マシラン。アルボンヌの村に通じて居る。街の道路は石を敷詰め、左右に狹き人道を設け、車道の左右を少しく低くして排水に便にし、人道を前にして、街の兩側に殆ど隙間なく住家或は穀倉が立並で居る。家は何れも石造であつて、家根は赤或は鼠色の瓦。最近の郵便電信局がシャーイー。森を隔て東南の方凡そ二里の處に有名なフオンテヌブローの町を控へて居る。

地理書か旅行案内に云はすれば、唯だこれ丈の實に採り處の無い一塞村であるが、畫かきの眼から觀ては、又た別に言はねばならぬ處がある。先づ村に入つてからの第一の感は其淋さ加減―人影は殆ど見へず、道の片隅に雞四五羽、積上た藁を引搔き廻す音なぞ藁と藁のすれ合う音まで細かに聽き取れる。これが此國の田舍であれば、何處かにドスン〳〵と米舂きの音が地震前の地響の樣に聞へると來る處であるが、佛蘭西の事であれば其音もなし。店とては店らしき家は更に見へず。四辻の壁に張付けた競賣の張紙、近鄕祭禮の廣告なぞ愈〻目立つて見へる。それに村の姿も、大に此寂寞の感を幇ける。家は大方は平家造り、森から離れた處の兩側は壁の部分が多い。今一層街幅を狹くし、道を坂にし、屋根を平らかにして、處々に見越しの無花果の樹を出させ、中庭に葡萄棚でも造らせれば、プロチダあたりの希臘風の町其儘。町幅の狹いと家の低い處と其建方の嚴重な處はポムペイの古市なぞ想ひ出させる。一筋道を東の方へ進むと道に向けて窓を開けた家など所々にあり、左方に別莊かとも思はれる、田舍にしては、目立て立派な家がある。玆がミレ未亡人の住宅と、人は敎へて呉れた。森の入口に間近く、聳へ立つ老樹の枝に何となく薄暗く感せらるゝ邊りには二三別莊風の住家がある、美術家の夏家でもあらうか。兎に角、此あたりは一體に都の風にあたつた跡が見へ、西側のバルビゾンとは稍や趣を異にして居る。併し寂寥は何處も同樣、搆への派手な丈に愈〻閑靜な感がされる。

（四）

畫かきがバルビゾンと聞て必らずミレを想ひ出すのは、例へばマドリッドと聞てヴェラスケスを想ひ、ヴェニスと聞てチシアンを想ひ出すと同じく、離れ難き連想である。處でバルビゾンの一寒村を發見して世にも有名な美術家の住地としたものはミレが初てやつたのであるとの考が浮かむかも知れぬが、これは決して左樣でなく、ミレが騷々しい、惡魔の巢窟と思つた巴里を捨て此地に移住した永い以前から既にバルビゾンは畫家の別天地となつて居つたのである。畫家の連中が此地を發見した事に就ては種々と話があるが、ヂュとアリニーの來たのが最も初と云ふてよからう。彼等のバルビゾン探檢談が斯うである。

今から殆ど八十年程前、一千八百二十四年の夏の初に、フヰリップ・ル・ジュとクロード・アリニー（コローを羅馬で褒め嘶したので有名な例のアリニー）と云ふ巴里在住の畫かきが、當時フオンテヌブローの陶器製造處の長をして居つた、これも同じ畫かきの友人ジャコッブ・プチーの許へ遊びにやつて來た。其時の事、ある日三人連れだつて畫料發見の爲と森林の探檢に出かけた。彼處此處と森中を彷徨し、目新らしいと、待設けぬ材料の夥多しいに釣られて、それから、それと追ひ暮し、さて歸りと足を返せば、どうしても路は分らず、いくら歩ても森から出ない。全く道を失ふた事と斷念した時には、早や太陽が樹の背に沈む頃であつた。腹は減る、足は疲れる、途方にくれて、愈〻何處か岩窟に野宿と決心して、さて塲所の撰定にかゝらうとすると、遠方に不思議な音が聞へる。須臾して、又た其音を聞き付けた。一同は希望を抱ひて其音の來た方へ進むと、流石老練の狩獵家丈に、其音を角笛と鑑定したのがヂュ。軈て鈴の音が聞へる。三人は力を得て、殆んど通れもせぬ林中を無理無體に潜り拔けて、漸々の事に牛を呼集めて居る牛飼に出會つた。畫かき共は「やれ、これで森を出られる」と悅ふに引かへて樵夫、薪拾ひの外か誰も見慣れぬ山中に、突然異樣な風體の男を見た牛飼は怪訝な顏。先づ塲所を尋れば「玆はアプルモンの峽間、フオンテヌブローの市から二里半」と云ふ。「とても今夜は歸る事は出來ぬ、何處か近邊に、何か喰はせ、泊らせて呉れる處があらう」と閉口して尋ると、牛飼の返答に「玆から半道斗かりの處にバルビゾンと云ふ村があり、僅か斗りの農家もあれば其處へ往けば麵麭と酒はあるが、併し泊れる處は知らん」と云ふ。「バルビゾン！バー！バー！バルビゾンとは强く野蠻だ。危ぶないものだが御前へが道を敎へて呉れるなれば、兎に角往つて見やう」と牛飼を眞先に、首へ鈴を付けた四五十匹の牛を道伴れにガラン〳〵の音に牽かれて怪しひ村指して出かけた。



フオンテヌブローの森の一部分
ロビンソン氏筆